

織田家の菩提寺に残る信長の肖像画について

元天童市立旧東村山郡役所資料館長 湯村章男

信長の肖像画は数多く残されているが、これまでもっとも広く流布し教科書などで親しまれているのは、愛知県豊田市長興寺所蔵の肖像画である。この画とちがひ、山形県天童市の三宝寺にある肖像画（右掲）は、陰影をともなっていて近代的で一見してリアルな印象を与える。めずらしさも手伝ってか近年いろいろなところで取り上げられるようになった。

この肖像画について、一番早く注目し全国で紹介したのは、作家の遠藤周作である。彼の対論集「たかが信長されど信長」（文芸春秋社 1992）の中でこの肖像画を紹介し、信長について人物評を展開している。それ以降、いろんな刊行物の表紙やグラビアに採用されたりしている。また、テレビの歴史番組などにも時々登場している。

この肖像画のいわれについて前掲の「たかが信長されど信長」では次のように説明している。「上（これ）は織田宗家の菩提寺、山形県天童市の三宝寺に伝えられる信長像。信長の死後、宣教師によって描かれた細密な絵を明治になってから複写し、宮内庁、織田宗家（天童藩十五代藩主子爵織田信恒氏…筆者注）、三宝寺で分け持ったという。織田家ではこの絵が信長にもっとも似ていると語り伝えられている。天童は、信長の二男のぶ信雄かつの直系の藩、代々の位牌をまつる三宝寺の仰徳こうとく殿でん内に、この絵は大切に保存されている。」（前掲117ページ）

〈複写された信長の肖像画〉

まず、注目したのは、この文中の「細密な絵を明治になってから複写し…」という複写した人物についてである。この写真の裏には「大武写真館」と赤い印がおされている。この大武写真館とは、天童織田藩出身の写真師大武丈夫が開いた写真館である。

彼は天童から仙台に出て、明治34年（1901）仙台市東一番町55番地で写真業を開業する。そして明治41年（1908）には大正天皇東北ご巡幸に供奉撮影の命を受け、東宮殿下松島行啓を撮影して

いる。明治42年（1909）には東京へ出て日比谷に写真館を新築開業。その後、宮内庁御用を受け、外国の展覧会等に出品し、しばしば最高賞を得ている。門人多数におよぶと「セピア色の肖像」（朝日ソノラマ刊 2000）にある。

彼の現存する記念写真としては、高橋是清や孫文、香淳皇后の写真などが有名だといわれている。大武丈夫は当時としてはかなりの写真家だったことがわかった。明治の中頃複写されたと思われるその写真は、現在仰徳殿（三宝寺境内）に飾られている。次にこの肖像画と織田家とのかかわりについて見てみよう。

天童藩代官佐藤次右衛門が著した勤仕録の天保6未年の項に次のような一文を見つづけることができた。

「天保六未年正月朔日 一例之通出仕之處、御太祖様尊像御書院奉掛、御中小姓以上席々拝礼相済候後、於御用部屋被相詰、同所詰御酒頂戴被仰付、…」（天童市史編集資料第14号）

織田家では藩主への年頭の挨拶の折り、毎年御太祖様（信長）の肖像画に拝礼し、その後家臣たちは御酒をいただくことになっている。これは、「例之通」とあることから初代藩主信雄以来営々と絶えることなく慣習として受け継がれてきたこ

とが想像できる。毎年拝礼を重ねてきた肖像画が、複製され三宝寺に残ったらしい。

〈宣教師が描いたといわれている信長の肖像画〉

この肖像画の原画が宣教師によって描かれたという言い伝えには、真正面から答えることはできないにしても、いろいろなことが想像される。

戦国時代の天文18年（1549）フランシスコ＝ザビエル来朝以来、天正15年（1587）秀吉のバテレン追放令がでるまで100人以上のイエズス会司祭や会士たちが日本を訪れている。信長は宣教師の布教活動を奨励し外国の情報や文物を広く受け入れ親しみをもって接し、彼らを「破格の寵愛」をもって受け入れたことはよく知られていることであり、「日本巡察記」（ヴァリニャーノ著 桃源社刊）や「耶蘇会士日本通信 上・下巻」（村上直次郎訳 雄松堂書店刊）にそのようすが詳しく描かれている。それによると、彼と親交を深め謁見できた宣教師は、ルイス＝フロイスをはじめ、ロレンソ、カブラル、ヴァリニャーノ、オルガンチーノ等をあげることができる。なかでも信長に最初に謁見できしかも数多く会うことができた宣教師は「日本史」の著者でもあるルイス＝フロイスであった。そのほか信長に信任された宣教師としては天正4年京うばやぎ都姥柳町に公会堂（南蛮寺）を建てたオルガンチーノがいる。また、イエズス会巡察使であり天正9年3月安土にセミナリオ（日本最初のキリシタン神学校）を建設したヴァリニャーノ等がいた。彼らは京の南蛮寺や安土のセミナリオや城内で信長に謁見し親しく交わっていたに違いない。その宣教師のいずれかが信長の肖像画を描いたとしてもおかしくはない。

では、次に「三宝寺の肖像画が最もよく信長に似ている…」ということについてふれてみたい。

信長に生前出合ったルイス＝フロイスは、彼の様子を次のように書き綴っている。

「尾張の王は、年齢37歳なるべく、長身瘦軀、髭少し。声は甚だ高く、非常に武技を好み、粗野なり。正義及び慈悲の業を楽しみ傲慢にして名誉を重んず。決断を秘し戦術に巧にして、殆ど規律

に服せず、部下の進言に従うこと稀なり…」(前掲「耶蘇会日本通信 上巻」とあり、おぼろげながら信長の容貌を描くことができるが、よりはっきりしているのは、本能寺の変で信長死後ちょうど一周忌に信長に仕えていた余語久三郎正勝が報恩のため狩野元秀に描かせた長興寺におさめた肖像画である。この肖像画がもっとも市民権をえている肖像画である。これと三宝寺のを比較した場合いずれも信長の容姿・風貌は、やはり、長身瘦軀で、さかやき（月代）は剃髪していないが、眉毛は濃く、しかも眼光鋭く、鼻下に八字髭を蓄え威厳堂々とした姿は共通しており、いずれも見るものに改革者としての殺気さえ感じさせる。ただ、三宝寺の肖像画は木炭で描いたデッサンともいわれ、陰影法で描かれており、当時の描法の吟味など美術史的解明をまたねばどうにもならないことであるが素人目にも線で描く日本画とは明らかに異なっている。しかし、どちらも信長を象徴している肖像画としては傑出したものである。

〈天童織田藩について〉

最後にこの肖像画のある三宝寺を菩提とする織田藩についてふれておこう。

天童織田藩は、二万石の小藩であるが織田信長の次男信雄を祖とする直系の子孫で織田の宗家になっている。信雄はのぶかつ大和国から小幡（現群馬県甘楽町）へ移り、その後明和4年（1767）九代信浮のぶちかの時代高島（現山形県南陽市）に移り、その後、十代信美のぶかずが天保元年（1830）天童へ移り、それ以降明治時代を迎えている。織田家で明治まで続いた藩は天童藩をはじめ柏原藩（兵庫県柏原町）、芝村藩（奈良県桜井市）、柳本藩（奈良県天理市）がある。昭和59年これら市町村に織田家にゆかりのある、墨俣町（岐阜県安八郡）、織田町（福井県丹生郡）、安土町（滋賀県蒲生郡）などの市町村も含め16市町村で、『織田サミット』が開催されている。それ以降、これらの市町村では互いに交流を深めながら、織田家の歴史資料の保存・活用などをふまえ、ふるさとの歴史を生かした町づくりが進められている。